

シンプルファイド・テクニカル・ジャパニーズ

—英訳を視野に入れて日本語を作る—

アクロリンクス株式会社代表取締役 **柳 英夫**

PROFILE

アクロリンクス株式会社・代表取締役。アジア太平洋地域統括担当。ソフトウェア製品の国際化、多言語化のプロジェクトに数多く携わり、現在は英文ドキュメントの品質向上を目指すアジア企業に、システムソリューションを提案する活動を行なっている。

✉ hideo.yanagi@gmail.com

TEL 03-5789-5973

1 はじめに

グローバル企業にとって、英語版ドキュメントは海外市場進出の要である。海外市場での競争力を維持するためには、製品に付随する文字列を単純に翻訳（現地語化）するだけでなく、迅速に、低コストで行うことが求められる。そのためには、翻訳というプロセスに関連する諸業務をいかに迅速に行うかがカギになる。

IBM、SAP、Symantec、SASなどの欧米のグローバル企業では、国内の限られた読み手だけを意識するのではなく、翻訳というプロセスを介した各国の読み手を意識する必要性にいち早く気づき、対策を打ってきた。

欧米のグローバル企業の現状に対して、日本の企業では「ライティング」（この場合は日本語）に対する規制・品質管理は、体系的に行われていないケースも少なくない。そのようなケースでは、企業の用語集が存在せず、スタイルガイドやライティングガイドラインも存在しない。

プロセスについては、日本語ドキュメントを作成し、英文に翻訳し、英語から他語に翻訳するという流れが主流である。このプロセスは、ドイツ、中国、韓国などの、英語を母国語としない国の企業にも見られる。

日本語から翻訳された英文ドキュメントについて、その言語品質の低さに悩む日本企業は多い。「日本語から翻訳された英文の品質が低いため、海外の現地法人が英文を書き直している（または新規で作直している）」ということが問題になっている日本企業もあると耳にする。コストをかけて翻訳した英文をそのまま使わずに、

書き直して（または新規で作直して）いるという二重作業は、企業にとって時間とコストの両方の面から望ましくないものと思われる。

2 シンプルファイドテクニカルジャパニーズを使用した日英翻訳方式

このような課題を解決するために、日本語をシンプルファイドテクニカルジャパニーズに修正してから、英訳する方法を提案する。最終的な目標は「英文の言語品質の向上」であるが、日本語を母国語とする者が品質を管理できる日本語だけに焦点を絞る。

2.1 STJルールセットの概要と効果

STJルールセットとは、シンプルファイドテクニカルジャパニーズ（Simplified Technical Japanese）ルールセットの略である。当社のAcrolinx IQの校正支援機能に組み込んで使用することで、書いた文章に対するチェック、修正、評価が可能になる。以下の方針に従い、約50のルールから構成される。

- a) シンプルに書く（冗長性の排除）
- b) 一意に理解できるように書く（あいまいさの排除）
- c) 表記、表現を統一する
- d) 英訳しやすくする

2.2 英訳しづらい日本語の表現パターン

ここでは、STJルールセットを開発した経緯から、英訳しづらい日本語の表現パターンを洗い出した方法について述べる。

当社がSTJの開発に着手した直接の契機は、複数の日本企業から「直訳すればいわゆる Simplified English と言えるような英文になる規制を、日本語に対してかけられないか」という問い合わせを受けたことにある。Simplified English とは曖昧な表現だが、本来の目標は「英文の言語品質を改善すること」であった。そこで、最初に複数の顧客データで英文を精査し、その翻訳元の日本語を付き合わせたところ、英文の品質が低いサンプルには、翻訳元の日本語に以下の傾向があった。

1. 「長い、複雑」
2. 「あいまい」
3. 「日本語固有の表現で書かれている」

当社がこれまで開発してきたルールは、テクニカルコミュニケーション協会発行の『日本語スタイルガイド』を実装したもので、1と2に関しては共通する観点もあったが、英訳の品質に直結するルールとして実装するために、より具体的なパターンを見つけ出す調査を行った。

英訳の品質に直結する要素を文法的に解釈し、その解釈を元に仮説を立て、仮のルールを開発し、他のデータに適用して結果を確認する、という作業を繰り返し行った。その結果完成したのが、以下の6つのパターンに対する規制を含む、STJルールセットである。

- 動詞 + 「ように」の組み合わせ
- 「など」で例示を終える
- 他動詞に対応する目的語があいまいである
- 助詞「は」格が1文中に2回以上出現する
- 副詞節が1文中に2回以上出現する
- 自動詞に対応する主語がない

ここでは、「副詞節が1文中に2回以上出現する」というパターンについて、その考察と、日本語規制の例、また機械翻訳による英訳実験結果を提示する。

3 実験例：副詞節が1文中に2回以上出現する

副詞節を規制する理由は以下の3点である。

1. 副詞節を多用すると、1文が長くなる傾向がある。
2. 係り受け構造が複雑になり、理解を妨げる。
3. 副詞節どうしの関係があいまいになる。

副詞節という文法用語は、一般に英文法の説明で使用される。時間、条件、結果、程度、様態、制限、場所などの意味を持つ、さまざまな単語で始まる従属節を総合的に副詞節と呼ぶことが一般的である。日本語文法では、時間節や条件説などとして複文構造の一部として説明されることが多いが、英訳への影響を考慮する観点から、英文法で使用される用語を用いた。規制の対象は、ドキュメントで使用されることが多い、以下の4種類とする。

1. 条件（例：～する場合、～すると）
2. 時間（例：～するとき）
3. 原因・理由（例：～であるため、～によって）
4. 目的（例：～するように、～するため）



3.1 実験方法

実験には、当社の顧客企業のマニュアルデータ、技術資料等を使用した。しかし、ここで結果の方向性を例示する際には、著作権の都合上、実データではなく、構造だけを引き継いで弊社で新たに作成した文章を使用する。

実験手順としては、STJルールセットに従い、特定のパターンに従って修正する前の日本語と、修正した後の日本語を英訳（機械翻訳）し、訳文の品質を比較する。機械翻訳には、市販のパッケージソフトウェアを3つ（A、B、C）使用した。品質の測定は、ネイティブレベルの英語力を持つ日本人がレビューし、評価する。

3.2 実験結果

【オリジナル】

最上部のフードを取り外すときは、バランスを考慮し、転倒を防止するために、必要に応じて取り外す前に補助支柱を使用してください。

（副詞節が3回出現）

A) When removing the topmost hood, in order to prevent a fall in consideration of balance, please use an auxiliary support before removing if needed.

（大きな破綻はないが、文章が長く、構造が複雑。以下同）

B) Please use a supporting prop to prevent a fall in consideration of balance when I remove the hood of the top before removing as needed.

C) Use a supplementary prop to prevent the fall in consideration of the balance before it detaches it if necessary when you detach food in the uppermost part.

【STJによる書き換え例】

最上部のフードを取り外すときは、バランスを考慮します。必要に応じて、フードを取り外す前に補助支柱を使

用して、転倒を防止してください。

（2文に分け、「転倒を防止」の部分を最後に移動）

A) When removing the topmost hood, take balance into consideration. If needed, please use an auxiliary support before removing a hood, and prevent a fall.

（依然として修正すべき言葉遣いや語順はあるが、オリジナルの訳文に比べ、訳文の修正が容易）

B) When I remove the hood of the top, consider balance. With a supporting prop, please prevent a fall before removing a hood as needed.

C) Consider the balance when you detach food in the uppermost part. Prevent the fall by using a supplementary prop before food is detached if necessary.

4 まとめ

今回の研究では、「英訳を意識した日本語構文を作成する」ことにより、「英文として品質の良い文章を導き出す」ことができる可能性を示すことができた。

この研究をさらに進めることで、人間による翻訳のスピードや、精度を高めるだけでなく、日本語から英語への機械翻訳にも応用することが期待できる。翻訳されていない大量のコンテンツをグローバルに発信する可能性を高め、国際競争力、影響力を高めることにもつながると考えられる。